

「キャプテン・フィリップス」★★★★

2013（平成25）年11月30日鑑賞<TOHOシネマズ梅田試写会>

監督：ポール・グリーングラス
原作：リチャード・フィリップス『キャプテンの責務』（早川文庫刊）
リチャード・フィリップス（船長）／トム・ハンクス
アンドレア・フィリップス（船長の妻）／キャサリン・キーナー
シェーン・マーフィー（副船長）／マイケル・チャーナス
ムセ（英語の堪能な海賊のリーダー）／パーカッド・アブディ
ピラル（少年の面影を残す海賊）／パーカッド・アブディラン
ナジェ（血気さかんな海賊）／ファイサル・アメッド
エルミ（海賊）／マハト・M・アリ
ケン・クイン／コーリー・ジョンソン
NAVY SEALs 司令官／マックス・マーティーニ
ジョン・クローナン／クリス・マルケイ

2013年・アメリカ映画・134分
配給／ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント

<ドラマ？それともドキュメンタリー？>

本作のパンフレットは700円だが、ジャーナリストの田原総一朗氏の「日本も決して対岸の火事ではない、この映画が投げかける社会の現実」と題するレビューを含め、レビューやコラムがやけに多い。写真集も綴られているが、その活字量の多さは映画のパンフレットとしては異例だ。そこで強調されているのは、ポール・グリーングラス監督が本作をあくまでリチャード・フィリップス船長の原作『キャプテンの責務』にもとづく実話としていることだ。ポール・グリーングラス監督といえば、『ボーン』シリーズの『ボーン・スプレマシー』（04年）や『ボーン・アルティメイタム』（07年）（『シネマルーム16』170頁参照）の監督だが、その特徴は『007』シリーズ風のド派手かつカッコいいアクションではなく、徹底したリアリズムが追求されていること。そんなボーン・グリーングラス監督だから、本来の持ち味は2001年の9・11世界同時多発テロを題材とした『ユナイテッド93』（06年）（『シネマルーム12』29頁参照）のようなドキュメンタリータッチの映画にある。しかし、本作は、2009年4月に起きたアメリカ船籍のコンテナ船マースク・アラバマ号がインド洋のソマリア沖で海賊に襲撃され、フィリップス船長が人質にされたという、現実起きた事件を題材としたドキュメンタリータッチの映画だが、さてどこまでリアリズムを？また、どこまでをフィクションに？

この「さじ加減」が難しいところだが、映画評論家の土屋好生氏は「グリーングラス流ドキュメンタリードラマの極意」というタイトルどおり、そのさじ加減を絶賛している。「ネタバレ厳禁」を合言葉として、あっと驚く仕掛けを設定したり、最後にビックリするようなドンデン返しの構成を誇るのも一方で映画の醍醐味だが、本作は完全にその逆。つまり、ストーリー展開はあくまで事実即しているし、結果も公表されているとおりの映画。したがって、それをスクリーン上でいかに迫力あるドラマとして見せていくかが勝負になる。すると、必然的に俳優の演技のウエイトが大きくなるのが当然だが、さて三度目のアカデミー賞主演男優賞の可能性まで指摘されているトム・ハンクスの演技は？また、アラバマ号を襲う4人の海賊を演じるソマリアの若者たちの演技は？

<海賊は犯罪？それともビジネス？>

『パイレーツ・オブ・カリビアン』（03年）（『シネマルーム3』101頁参照）、『パイレーツ・オブ・カリビアン/デッドマンズ・チェスト』（06年）（『シネマルーム11』20頁参照）、『パイレーツ・オブ・カリビアン ワールド・エンド』（07年）（『シネマルーム15』14頁参照）の3作は「これぞエンタメ！」を地で行く作品で、私はそのすべてに星5つをつけた。こんな映画や、私が中学生の頃に大流行したNHK総合テレビの人形劇『ひょっこりひょうたん島』などを観ていると、海賊は自由気ままに楽しそうな職業と錯覚してしまいそう。しかし、それは大きな過ちで、海賊行為はレッキとした犯罪だ。現に、アラバマ号襲撃事件ではピラル（パーカッド・アブディラン）、ナジェ（ファイサル・アメッド）、エルミ（マハト・M・アリ）という3人のソマリア人の海賊はアメリカが誇るNAVY SEALsによって射殺され、また終始フィリップス船長と渡り合った、英語も堪能な海賊のリーダーであるムセ（パーカッド・アブディ）は懲役33年の刑を受けて現在服役中だ。

アラバマ号にはフィリップス船長の他、その右腕とも言うべき副船長シェーン・マーフィー（マイケル・チャーナス）ら20名の乗組員が乗っていたが、武器の携行はゼロ。したがって、たった4人でも、またいくら小さなボートでも、ホースからの放水をくぐり抜けかつ銃を乱射しながら接近し、船に梯子をかけてよじ登られたら、フィリップス船長にはもう抵抗の手段はない。また、アラバマ号もその乗組員もあくまで民間だから、命を賭けて海賊とやり合う度胸もなければ、腕に覚えもないのは当然。それは映画を観る前からわかっていたが、本作を観てはじめてわかったのは、海賊の方も武器は持っているものの、それはあくまで脅しのためであり、人を殺すつもりなど全くなく、あくまでビジネス(?)として、乗り込んだ船から金目のものをぶんどっていくのが目的ということだ。よく考えてみればそれは当然だが、たまたま乗り込んだ船の中に現金や金目のものが大量にあればいいが、それが無い場合はどうするの？

4人の海賊の武力の前に屈服したフィリップス船長は、リーダーのムセに対して、金庫の中にある3万ドルの現金を渡すことによってすべてケリをつけようという提案したが、ムセはこれを拒否。以前に600万ドルを提供させたことがあると自慢していたが、さてそれは本当？もし本当だとしたら一体どうやって・・・？船を乗っ取ったり、本作のように船長を人質にとったとしても、それをネタにして船会社や保険会社、さらに政府から多額の金を提供させるためには、「交渉」とその「実行」が不可欠だが、ホントにそんなことができるの？

<私の疑問その1 ムセの要求はナニ？>

本作は土屋好生氏の言うとおりの「ドキュメンタリードラマ」として、前半は、①小型高速ボートによるアラバマ号の追跡②ホースからの放水をかくぐつてのアラバマ号への侵入③武器で脅かしながらのキャピンの制圧④ムセとフィリップ船長との交渉（心理戦）、というストーリーが緊迫感いっぱい進行していく。しかし私の目には、これはドラマとしては面白いものの、ドキュメンタリーとしてはいくつかの疑問が湧いてくる。そこで、本作の評論ではそれを指摘したい。

まず第1は、4人のソマリア人海賊のリーダー格であるムセの、フィリップ船長に対する要求が明確でないことだ。フィリップス船長からは船の中の金庫に3万ドル保管されているので、それを提供することによってすべて終わりにしようという提案されるが、ムセはそれを拒否するだけで、具体的に何をしろという要求は一切出されない。ムセたちはアラバマ号がアメリカ船籍であることを知って大喜びするが、それはアラバマ号とその積荷をすべて強奪することを意味するものではないはず。こんな巨大なコンテナ船をそのまま強奪しても、自分たちが操艦できない以上何の意味もないからだ。

私が理解したのは、ムセたちの任務は、乗っ取った船をソマリアの港まで航行させるだけで、あとはムセたちのバックにいる「將軍」や「長老」が船会社や保険会社と「交渉」して、金をふんだくるといふ筋書きだろうということだが、それならムセは何も本作のようなストーリー展開にしてい必要はなかったのでは？ムセたちの具体的要求は一体ナニ？それが明確にならないから、私は少しいらいら。。

<私の疑問その2 ムセはなぜ乗組員捜しに？>

10月22日に発覚した、阪急阪神ホテルズの食品偽装（当初は誤表示）問題は、私に言わせればきわめて単純な「偽装」で、騙される方もかなりバカだと思っている。それと同じように、本作でフィリップス船長がムセたちにみせる「偽装」はきわめて単純なもの。つまり、フィリップス船長は当初①船が故障して動かない②乗組員たちは逃げてしまっ、どこにいるかわからない、という単純な「偽装」をし、それを信用しないムセが船長と一緒に乗組員を捜しに出かけると、乗組員と無線で連絡を取り合いながら、さらに停電工作をしたり、機関室の入口にガラスの破片をばらまくというリスクな偽装までも・・・。こんな展開は、つくりもののドラマなら「なるほど」と思えるし、それなりにスリリングなものだが、これがドキュメンタリーとなると、こんな単純な偽装に騙されるムセは相当なバカ？とってしまう。もっとも、ムセは当初乗組員が逃げてしまったというフィリップス船長の言葉を信用せず、乗組員が出てこなければ今日の前にいる乗組員を一人一人殺していくと宣言し、問答無用に行きを実行しようとするから、にわかに緊張感が走ってくる。結果としては、ギリギリのところまで、ムセが折れてきたため、フィリップス船長の「戦術」が成功したわけだが、乗組員の命を預かる責任者として、こんなバカのようなギリギリの交渉をしていいの？こんなリスクなことをやってはダメなのでは？

ムセの目的としては、乗組員捜しの他、船の全体を制圧し、その構造を把握したいという気持ちがあったようだが、そもそもそれは海賊としての本来の目的とは何の関係もないのでは・・・？

<私の疑問その3 人質事件への変質は判断ミスのため？>

本作後半は、アラバマ号に積んであった小さな救助艇の中に海賊たちの人質とされたフィリップス船長をいかに救出するかがテーマになる。驚くべきは、そのために米国海軍の護衛艦2隻、小型空母1隻が現場に急行する他、『ネイビーシールズ』（12年）で有名になったNAVY SEALs（『シネマルーム29』126頁参照）までが動員されることだ。『エネミー・ライン』（02年）では、ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争における一人のアメリカ軍兵士の脱出劇を「アメリカ讃歌」の色濃く描いた（『シネマルーム1』71頁参照）が、本作を観れば、アメリカという国がここまで自国民の安全のために総力を挙げてくれることにビックリ！

もっとも、そこで起きる私の疑問は、なぜフィリップス船長は人質になるような危険な行動を選んだのか？ということだ。大勢の人質を巻き込むと混乱が大きくなるので、「代表者」一人が自ら人質になる道を選ぶケースは時々あるが、本作でフィリップス船長が人質にされたのは、ちょっとしたミスとムセの欺しうちのためだ。乗組員たちのさまざまな知恵によってムセを捕虜にした結果、船内の力関係は一気に逆転。ムセは現金3万ドルの受領と、救助艇の提供で妥協せざるを得ないことに。ところが、ムセはそれでいったん合意を成立させたにもかかわらず、一瞬の隙をみて救助艇にフィリップスを残したまま救助艇を発進させたから大変。これによって、フィリップスや乗組員たちを完全に欺いたわけだ。フィリップスの計算どおり、3万ドルを渡して4人の海賊をソマリアまで返してやれば、アラバマ号の損害はごく軽微で済んだはずだが、ちょっとしたミスとムセの欺しうちのためにフィリップスが人質にとられることに。その結果、本作後半に描かれる人質救出大事件になるわけだが、それはフィリップス船長の重大な判断ミスのためでは？

つまり、ここで私が言いたいことは、フィリップス船長は金庫内にある3万ドルだけで話をつけるのではなく、カネの上積み交渉を積極的に進めることによって、事態の解決を目指した方が良かったのではないかと、ということだ。それはいかにも日本人的な発想だと批判されるかもしれないが、武器を持った海賊に襲われてしまった以上、海賊も「ビジネス」と言っているのだからあえて、「ビジネス」として交渉をまとめた方が人質事件、生命の危険、軍隊の出動、犯人の射殺まで想定した人質救出劇、よりはよほどマシだったのでは・・・？

<船長は普通の人が優れたリーダー？それともヒーロー？>

ポール・グリーングラス監督は、『ボーン』シリーズではマット・デイモンをリアリティあふれるアクション・ヒーローに仕立て上げたが、本作ではフィリップス船長をそのようなアクション・ヒーローにすることを避けた。インタビューの中で彼は、「そのドラマチックな経験とは正反対に、フィリップス自身はごく普通の男だということが重要なんだよ。失礼なことを言ってしまうと、彼は特に際立ったところは何もない、アクションヒーローになるスキルは何も持ち合わせていないんだ。そんなごく普通の男の彼が、極めて危険な事態に直面し、その状況にいかに対応していくか。そしてその過程でどのような英知を身につけていくかということ、エンタテインメントとして見せないといけない、というのが僕らの大命題だったんだよ。」と述べている。他方、フィリップス船長を演じたトム・ハンクスは「優れたリーダーの役を演じたことで、その賞賛というものも分かったんじゃないですか？」との質問に対して、「僕自身はリーダーじゃないね（笑）。単に映画の中でリーダーを演じただけだと思う。だけど、フィリップス船長のようなリーダーというのは、何よりも自信を持つことだと感じたよ。」と答えている。たしかに、本作の流れに沿って、フィリップス船長の行動を見ていくと、毎日会社に行くサラリーマンが、ルーティーンの仕事をして給料をもらっているのと同じように、彼はコンテナ船を指揮して積荷を目的地に運ぶというルーティーンワークを年に数回（数十回？）しているだけのように思えてくる。

私は松山に住んでいたため、小さいころは松山から大阪に来る時は、いつも関西汽船の船に一晚乗っていたが、フィリップス船長の仕事は、運ぶのが乗客ではなく積荷だという違いがあるだけで、関西汽船の船長と同じ。もっとも、瀬戸内海は昔は「村上水軍」という海賊がいたものの、現在は波もおだやかで安全この上ない航路だが、フィリップス船長が進む「東アフリカ4」航路は、海賊が毎日のように出没する危険な航路だ。しかし、そんな危険な航路であるからこそ、きっとフィリップス船長の給料は関西汽船の船長よりよほど高いはずだ。

ならば、もし海賊に襲われたら、船長としていかなる行動をとるべきなの？前述のようにポール・グリーングラス監督は、フィリップス船長をアクション・ヒーローではなく、ごく普通の人と表現しているが、何の何の！また、トム・ハンクスはフィリップス船長のリーダー性を褒めたたえているが、何の何の！本作後半からクライマックスにかけての彼の勇気ある行動（ある意味ではヤバイ行動？）を見てみると、私の目には彼はまさにアクション・ヒーローに見えてくるが、さてあなたの目には・・・？